

巻 頭 言

常務取締役
千葉製鉄所長

君 嶋 英 彦



近年、薄板の品質が向上するにしがたい、自動車、電機、容器、建材等の分野で薄板の用途が広がり、新しい使い方がされている。それにつれて、寸法、精度、強度、加工性、溶接性、耐食性に対して要求がますます高度化するようになった。

これに対して、連続鋳造、ダイレクトロール、冷延連続化、連続焼鈍等の技術により、コストダウン、材質の均質化や寸法精度の向上が顕著に行われた。幅方向の厚み精度もプロフィール制御技術の開発により大幅に進歩した。最近では、鉄の欠点をカバーする耐食性技術に対する要求が各方面から寄せられ、種々の表面処理技術が試みられ、発展してきている。また、自動車のCAFE (corporate average fuel economy) 対応にみられるような軽量化の為の加工性をもった高強度材料や制振性を持った材料、これらに対する溶接性の要求等が出されている。

これらの要求に対して、他の材料との競合と協調を考えながら、薄板の用途に応じたあるべき姿を追求し、提供出来るようにすることが我々の使命と考えている。

当社は、最近だけでも、日本におけるハンダ溶接缶のシーム溶接缶への移行に多大の貢献をした食缶用新表面処理鋼板「リバーウェルト」(1985年度大河内記念技術賞)、自動車の軽量化にも貢献した焼付硬化型超深絞り性高強度鋼板(1988年度市村賞(貢献賞))、自動車の高級な質感を高めることに寄与した自動車用高鮮映性鋼板「レーザーミラー」(1989年度大河内記念生産賞)を始め多くの表彰を受けた。いずれもお客様に満足していただいたものばかりである。

本特集号では、最近当社で開発あるいは実施された技術の一端を紹介している。多方面からのご批判をいただければ幸いである。